

大学生の地域活動がまちづくりに及ぼす影響

高木 朗義¹・永井 信明²・杉浦 聡志³

¹正会員 岐阜大学教授 工学部社会基盤工学科 (〒501-1193 岐阜市柳戸1-1)

E-mail:a_takagi@gifu-u.ac.jp

²公益財団法人岐阜県建設研究センター (〒503-0807 大垣市今宿6丁目52番地18 ワークショップ24)

E-mail:

³岐阜大学助教 工学部社会基盤工学科 (〒501-1193 岐阜市柳戸1-1)

E-mail:sugi_s@gifu-u.ac.jp

本研究は、大学生による地域活動に着目し、地域住民による主体的なまちづくりの事例を対象に、ヒアリング調査に基づいて、大学生の地域活動がまちづくりにおいて有用な効果をもたらす要件を整理し、外部者による地域活動の在り方を考察したものである。調査からまちづくり活動を行う地域住民の主観的な評価が「大学生の地域参画の方法」と「地域コーディネーターの役割」に関係していることがわかった。また、大学生による「企画」、「運営」、「企画・運営」の地域参画の方法を比較分析することで、「地域住民の次回のまちづくり活動の参考となるために、実践の成果を地域にフィードバックすること」、「地域コーディネーターが課題設定を行い、活動の場を整えること」が大学生の地域活動が有用な取り組みになるための要件として整理できた。

Key Words : 大学生, 地域活性, まちづくり

1. はじめに

わが国では、阪神・淡路大震災を契機としたNPO団体やボランティア活動に注目が集まり、地域住民が「地域づくり」に参加するようになった¹⁾。従来も「地域づくり」は各地で進められてきたが、国の制度や主導のもと、地方自治体や商工会などの組織が地域づくりを進めることが多かった。2000年代の「まちづくり」では、それまでの住民参加の「まちづくり」の蓄積から、まちづくりを考える上で中心となる「地域協働」という概念の誕生と、その担い手となるNPOをはじめとした市民活動の主体の多元化、および地域のまちづくりに対する住民意識の高まりなどが起こると述べられている。地域の多様な主体が「パートナーシップ」や「協働」し、住民自身が地域にアプローチをかける地域主導のまちづくり活動が行われるようになってきている。

敷田(2009)によると、地域づくりの現場では、半ば信仰のように「よそ者・若者・ばか者」という3者の役割が強調され、また研究者や論者も少なからずこの表現を用いている。中でも「よそ者」は数多く引用され、地域外から来たよそ者が地域づくりで活躍することが好意的に紹介されていることが多い¹⁾。例えば、小高(2005)は、

日産の経営改革におけるカルロス・ゴーンの役割について、組織は仲間意識だけでは限界があるとし、変革や改革のときには、過去のしがらみにとらわれない「客観性」といったものが必要だと述べている²⁾。学生のボランティア活動の効果に関して、石野(2013)は以下のように述べられている。①単に地域住民でないという意味だけでなく、その年齢や社会的立場からも利害関係から外れていると見なされやすい。②地域の住人ではないが、地域の中で一定時間過ごす存在でもある。③子どもと大人の間の世代として、特に子どもと高齢者のつなぎ役として機能しやすい。④学び途中の存在であることと、社会的に半端な身分であることから、「何のためにボランティアをやっているのか」が、より変幻自在に説明可能／不可能である(学びの途中の存在だから、時間があるから、自己肯定感を求めているから)などの特徴が挙げ、大学生による地域活動に期待があることを示した³⁾。

地域のよそ者として県行政がまちづくりに関与した事例もある。岐阜県では、平成19年から平成26年にかけて、地域住民、NPO団体及び企業などが市町村と連携した地域づくりを目的とし、「まちづくり支援チーム」および「ふるさと応援チーム」(以下、支援チーム)の派遣が、県内10地域で実施された。岐阜県においても、高知県⁴⁾

や京都府⁵⁾の事例と同様に、県行政と地域住民が主体的に地域課題に取り組み、地域住民主体のまちづくり活動の促進に努めた。2事例が県行政職員を市町村の役場や振興事務所に在任するのに対し、県行政職員が直接派遣対象地域に出向き、地域の活動団体と対話を通じて地域ビジョンの作成を補助し、まちづくり活動の基盤づくりを支援したことが特徴である⁶⁾。地域住民等のまちづくりの現場に県行政が直接出向き、地域の課題を県全体の課題として捉え、地域住民連携してまちづくり活動を実践する支援を「伴走型」支援と定義する。

2. 本研究の目的

大学生の地域活動が地域のまちづくりに寄与することに期待がある。しかし、大学生の地域活動はプロジェクト参加による大学生の学習効果についての評価がほとんどである。そのため、素朴な「よそ者信仰」がまちづくりの現場で宣伝されることも多く、川口ら(2007)において、大学生と商店街の共同作業が当初の予定と異なって学生の時間・体力に依存する形となった。その結果、共同の形が崩れ、参加した学生が不満を感じたとされる⁷⁾。まちづくりの現場で、どうして大学生が評価されているのか、まちづくりに大学生が寄与できる理由は何なのかなど、まちづくりにおける大学生の効果やそのメカニズムは明らかにされていない。

そこで本研究は、大学生の地域活動に着目し、地域のまちづくりにどのように関与するのかケーススタディーを行う。地域住民と大学生が主体的にまちづくりに関わることおよび、両者が連携してまちづく活動を実施する関係性を構築することが重要であることを明らかにする。大学生の地域活動による地域住民の意識や行動の変化を通じて、地域住民および外部者の意図していた活動以上に、よい活動が実施されることが期待できる。大学生の地域活動を比較分析することで、地域にとってよりよいまちづくりをするために、大学生がどのようなことに配慮しながら地域に関与するのかを明らかにする。なお、本研究で「地域」とは、一定の地理的範囲とそこに住む住民やその関係性を表す。これは社会学で用いられる「地域社会」や「地域コミュニティ」とほぼ同じ意味である。また、地域に在住するあるいは密接に関係を持つ人が、継続的にモノ・コトを行うことを「まちづくり」とする。

3. 研究の方法

本研究における「まちづくり」とは、地域に在住す

るあるいは密接に関係を持つ人が、継続的にモノ・コトを行うことを指す。ヒアリング調査は地域住民が外部者の地域活動をどのように感じていたのかを明らかにするために、大学生と支援チーム両者ともに、共通の質問事項を5つ設定した。同時に、地域住民に大学生の地域活動に関するアンケート調査を実施し、大学生の意図した活動を地域側の主観的評価により確認する。支援チームは受援者側と支援者側の両者にヒアリング調査を実施することで、地域のまちづくりに与えた影響を双方向的に考察する。

平成28年10月13日から平成29年1月5日にかけて、4地域（飛騨市宮川町種蔵地区、郡上市白鳥町石徹白地区、養老町、郡上市明宝地区）にヒアリング調査を実施した。調査項目を以下に示す。

質問1. 大学生の地域活動に対する印象
質問2. 大学生の地域活動による成果
質問3. 大学生の地域活動による住民の意識・行動の変化
質問4. まちづくりに関する取り組み継続の有無
質問5. 大学生の地域活動の課題

4. 大学生の地域活動

表1の大学生の地域活動に関するヒアリング調査の結果について大学生の地域参画の方法を「企画」、「運営」、「企画・運営」の3つに分類して整理を行う。

(1) 企画

Cの「おんぱく企画」、Eの「冬合宿」、Lの「まちづくりリーダー」において、大学生は主にイベントの構想に関与した。「企画」のみ大学生が参画する活動においては、Cのように大学校内のみで振り返りを行ってしまうことで、企画内容を地域のまちづくりに参加する地域住民が知る機会がなく、地域に全く影響を与えない場合があることがわかった。一方でEとLのように現地で振り返りや発表などのフィードバックを行うと、地域のまちづくりに参加する地域住民が大学生の活動の成果を知ることができる。そのため、EとLの話し合いの中で決められた事項が実践に移ることとなった。大学生が「企画」の方法で地域活動する際には、地域コーディネーターが大学生の地域活動の知見・成果をフィードバックするなど、地域と大学生のニーズを調整することで、地域の継続的な取り組みに寄与できると考えられる。

(2) 運営

Aの「種蔵そば」、Dの「夏合宿」、Fの「キャンドルナイト」、Kの「インターンシップ」、Oの「冒険キッズ」において、大学生は主にイベント実施に当たっての

単純な作業など、労働力としての活動を行った。「運営」において、A, D, F, K, Oは大学生が人的労働力を地域に供出したことで、一定水準の評価を得ている。Aは継続的に大学生が地域に関わりを持つとともに、大学生自身が地域住民と直接連絡を取りながら、準備段階から日程などの細かい調整を行っている。これらの活動を受け、地域側は大学生を単なる労働力として見るのではなく、一緒に活動するパートナーとして、信頼感や期待感を持っている。大学生が「運営」の方法で地域活動する際には、人的労働力としてボランティア的活動をすることで、集客イベントの開催に貢献できる場合がある。

(3) 企画・運営

Bの「種蔵ウォークラリー」、Gの「秘密基地づくり」、Hの「石徹白ウォークラリー」、Iの「秘密基地大作戦」、Jの「石徹白マップづくり」、Mの「フォトロゲイニング」、Nの「養老クエスト」、Pの「明宝ツアー」において、大学生は大学生がイベントの企画から実施まで行った。「企画・運営」は大学生の持ち込み企画として集客イベントを実施することで、地域に「新しいアイデア」が提供され、イベント参加者に地域の新たな魅力を発信できる可能性がある。また、新規企画に取り組むことで、地域住民が主体で企画するまちづくり活動の参考となる場合もある。しかし、地域のまちづくりの担い手不足や地域のキャパシティの問題など地域側の課題により、継続的なまちづくり活動にならないこともある。大学生が「企画・運営」の方法で地域活動する際には、集客イベントを実施することで地域の魅力を発信することができる。継続的なまちづくり活動にしたいのであれば、地域住民と協働した企画にすることで地域のニーズに沿った継続的な取り組みになる可能性がある。

(4) 参画方法による比較分析

大学生の地域参画の方法として分類した「企画」、「運営」、「企画・運営」を比較する。「企画」は実践に移るための準備段階で、多様な意見を集約するための「人手」として大学生は期待されていることが多い。「運営」は実践段階に至った際の人的労働力としての「人手」として大学生は期待されている。それら2つの関わり方と大きく異なるのが、「企画・実践」である。この参画方法は大学生が地域活動を自身で考え実施まで行うことが多い。地域住民の存在を介在させなくても地域活動ができてしまうので、まちづくりに関わる住民が直接知る機会が少ない。ただし、客観的事実として、大学生が「企画・実践」の方法で地域活動をすることで、地域の魅力を多方面に発信することができている事例もある。

それぞれの参画の方法において、地域コーディネータ

表1 事業一覧

地域名	記号	活動名	参画方法	活動期間	来訪数	ブローカー
種蔵	A	種蔵そば	運営	8年	数十回	a
	B	種蔵ウォークラリー	企画・運営	7年	7回	a
石徹白	C	おんぱく企画	企画	半年	約5回	b
	D	夏合宿	運営	単発	1回	b
	E	冬合宿	企画	単発	1回	b
	F	キャンドル	運営	単発	1回	b
	G	秘密基地づくり	企画・運営	半年	約5回	b
	H	石徹白ウォークラリー	企画・運営	半年	約5回	b
	I	秘密基地大作戦	企画・運営	半年	約5回	b
	J	マップづくり	企画・運営	半年	約5回	b
	K	インターンシップ	運営	1カ月	1カ月	b
養老	L	まちづくりリーダー	企画	半年	約5回	c
	M	フォトロゲイニング	企画・運営	半年	約5回	c
	N	養老クエスト	企画・運営	半年	約3回	c
明宝	O	冒険キッズ	運営	10年	多数	b
	P	明宝ツアー	企画・運営	半年	約5回	b

の調整力が大学生の地域活動を是非に大きく影響するということが、共通事項として考察できる。大学と地域のブローカーの役割を担う人材が地域の課題、目的意識をすり合せ、「大学生と地域がどのように関わるか」を定める。日程や活動のエリアを調整するなどの事前準備を行うことで、大学生の地域活動が「開催されてすぐに終わる」のではなく、住民との触れ合う場所を設定して地域のまちづくり活動に寄与する形となると考えられる。

5. 大学生の地域活動がまちづくりに影響を与えるプロセス

大学生の地域活動が地域のまちづくりに影響を与えるプロセスを図1によって図示した。大学と地域の2つのコミュニティがあり、それぞれのコミュニティ内で密なネットワークを形成している。そして、ブローカーの役割を担う地域や大学の中核をなす存在が他のコミュニティと緩やかなネットワークを形成している。2つのコミュニティは自身のコミュニティ内で地域活動を行うが、ブ

ローカーが仲介・調整することで、互いに影響を与えながら活動を行っている。

大学生の地域活動は、実践の成果を地域にフィードバックし、次回の取り組み内容の参考となっている場合に評価が高い。大学生の地域活動は、地域が「自立し」、「持続」的なまちづくり活動の一助になることが示唆される。この効果はそれぞれのコミュニティの地域コーディネーターが課題設定を行い、主体的なまちづくりを実施するための活動の場を整えることでより機能すると考えられる。

5. おわりに

本研究では、大学生の地域活動について、その有用性を考察した。地域住民にヒアリング調査することで、大学生の地域活動の評価を行ったが、ヒアリング対象の主観的な評価に基づくものとなっており、客観的な事実による裏付けが不足している。地域のまちづくりを参与観察するかアクションリサーチをするなど、実地域の取り組みに踏み込んだ研究手法をとることで、まちづくりで得られたモノ・コトを事実として確認することが必要である。

参考文献

- 1) 敷田麻実, よそ者と地域づくりにおけるその役割に関する研究, 国際広報メディア・観光学ジャーナル, 2009
- 2) 小高加奈子, 日産の経営改革における「よそ者」の戦略的役割, 奈良女子大学社会学論集, 第12号, pp.233-252.
- 3) 石野由香里, 「学生ボランティア」の特異性が地域

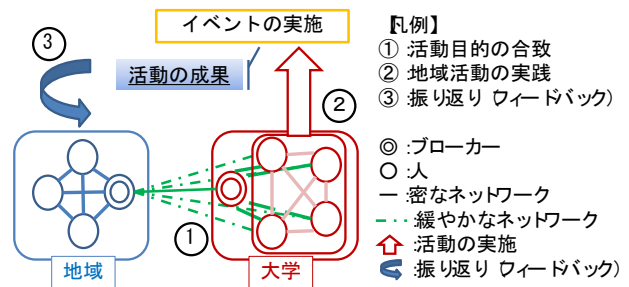


図1 大学生の地域活動のプロセス

に対して有する潜在的機能—ボランティアをする／されるの関係をズラす効果が地域の場づくりへ与えた影響—, 生活学論第23号, 2013

- 4) 梅村仁: 高知県における地域支援企画員制度と中山間地域問題への対応, 湘南フォーラム, vol19, p59-68, 2015
- 5) 共に育む「命の里」: 京都府ホームページ, <http://www.pref.kyoto.jp/inochinosato/1322532529868.html> (閲覧日: 2017年7月13日)
- 6) 永井信明, 大野沙知子, 高木朗義, 住民の主体的なまちづくり活動を促進する県職員の伴走型支援活動に関する考察, 土木計画学研究・講演集, Vol52.79, 2015
- 7) 川口友一朗, 下川勇, 大学生におけるまちづくり連携の実際について, 日本建築学会大会学術講演集, 2007.8.